

令和6年度（2024年度）第3回函館市まち・ひと・しごと創生推進会議

会議録

- 開催日時：令和6年（2024年）11月28日（木） 10:00～11:20
- 開催場所：函館市役所本庁舎8階第1会議室
- 出席者
委員：齋藤委員，岡崎委員，奥平委員，田村委員，相庭委員，
長谷川委員（委員名簿順 [6名]）
市側：[企画部] 阿部部長，渡邊室長，木谷計画調整課長，
村上移住・人口減担当課長，上野地域デジタル課長，
村瀬主査，池田主事

.....
次 第

- 1 開 会
- 2 議 事
 - (1) 「函館市人口ビジョン（令和6年改訂版）」（骨子案）[資料1]
 - (2) 令和6年度 地方創生に関するアンケート調査，地域幸福度（Well-Being）
指標に関するアンケート調査 結果報告書 [資料2]
 - (3) 第3期函館市活性化総合戦略（骨子案） [資料3]
- 3 その他
- 4 閉 会

..... 1 開 会

(事務局 木谷課長)

ただ今から、令和6年度第3回函館市まち・ひと・しごと創生推進会議を開催する。

本会議については原則公開で行い、会議内容については、開催後に本市のホームページで公開する。

本日の会議は、都合により2名の委員が欠席しているが、委員8名中、過半数の6名の出席があることから、会議が成立することを報告する。

以降、まち・ひと・しごと創生推進会議設置要綱第6条第3項に基づき、奥平委員長に会議の進行をお願いする。

..... 2 議 事

(奥平委員長)

本日は、3件の議題があり、1つ目は「函館市人口ビジョン（令和6年改訂版）」（骨子案）について、2つ目は令和6年度地方創生に関するアンケート調査、地域幸福度（Well-Being）指標に関するアンケート調査結果報告書について、3つ目は第3期函館市活性化総合戦略（骨子案）についてである。

それでは、早速、議事（1）「函館市人口ビジョン（令和6年改訂版）」（骨子案）に入る。

資料について、事務局から説明をお願いする。

(事務局 村上課長)

【 資料1 】に基づき説明

(奥平委員長)

ただ今説明のあった資料1について、質問や意見はあるか。質問等なければ、「函館市人口ビジョン（令和6年改訂版）」（骨子案）については、終了したい。

続いて、議事（2）令和6年度地方創生に関するアンケート調査、地域幸福度（Well-Being）指標に関するアンケート調査結果報告書に入る。

資料について事務局から説明をお願いする。

(事務局 木谷課長)

【 資料2 】に基づき説明

(奥平委員長)

ただ今説明のあった資料2について、質問や意見はあるか。

(岡崎副委員長)

色々とデータを拝見して参考になった。私の関係の中でみると、子育ての部分が気になる。例えば64ページの4—⑥子育ての主観指標だが、子育ての支援が手厚い

というところが偏差値 39.7 ということで、50 を切っている。近年、函館市は非常に子育て支援を一生懸命やっていると思う。第2子以降の保育料無償化など、色々実施している中で、少し低いと思う。子育てがしやすすくないというのは、各年代でもそのように捉えているので、その辺りのギャップはどういうところから来るのかという点が気になる。近年になって、色々なことをやり始めているというところもあると思うが、市民の皆様こんな色々な制度やサービスをやっているということをもっと周知していく必要があると思う。

それから、経済的な支援が必要という意見が結婚など色々なところであり、それは最もなことだと思う。20代、30代は収入が低く、そこで子どもが生まれるとかなり厳しいのだとしても、ただお金をあげれば良いというものでもない。それこそ、令和5年度から始めた、出産前に5万円、そして出産後に5万円、合計10万円を給付する事業のように、ただ給付するだけでなく、出産前には妊娠届と一緒に面談してください、出産後は家庭訪問を受け入れてくださいというようなサービスと一体で給付を行うというスタイルは非常にいい視点であると思う。ただお金を給付するだけではなく、給付する時にサービスや相談を一緒にする。無関心な人、煩わしく思い関わろうとしない人がある意味、現金給付により誘導していくという、そういう取組は今後も様々な分野で考えても良いのではないかな。

(奥平委員長)

子育て終わりかけ、終わり、子育て中、色々であると思う。私の話をすると、子育てがほとんど終わりかかっているが、かつて育児サポートのため、五稜郭や花園町の施設に私も一緒に行った記憶がある。そのような取組は、市の方で昔からやっていると感じる。

先ほどの岡崎副委員長の話の、なぜ子育て支援の数値が低いのかという部分では、周りのまちが充実しすぎているのではないかなと思う。今までずっと周りのまちがすごく充実していたために、函館市が急に始めても、目立たないということは確かにあると思う。もう少し積極的にPRが必要ではないかなと思う。昔から市役所の方は大変控えめだが、もう少しやっていることはやっているということと言わないと、多分市民は分からないのではないかと、先ほどの岡崎副委員長の話を伺い、考えたところである。これは他の会議でも同様の話が出るので、その部分での市役所の姿勢というところも実は大変重要であり、どのように市民に働きかけていくかというのが、これからの課題ではないかなと感じている。

(齋藤委員)

大変膨大なアンケートで色々分析されているとは思いますが、函館の問題はたった1つであり、雇用と所得の問題だけだと思う。皆様がアンケートを答えているのだが、他のまちにたくさん住み、比較してというデータではないので、これが正しいかどうかというと、客観データと比べてどうであるかや、100万都市や地方都市に比べてどうであるかなどで、当然変わってくる場所もあると思う。これが本当に正しいデータかどうかはわからない。函館で1番問題なのは、雇用と所得。何がというと、決定的に大企業がない。数千名の上場企業がある都市は企業城下町と言われ、その企業に所属している人はある程度安定的な収益を得て、安定的な生活を送れて

いると思うが、やはり所得が少ないことによって、多少の色々な行政からの補助があったとしても、それでも厳しいと、それが現実であると思う。ある程度収入があるような層では子育て関係というのは問題ないと思うが、収入の少ない方あるいは母子家庭の方は、多少の補助だと非常に厳しいのだと思う。そこをどのように解決していくか、非常に難しい問題になるが、ただ安直に、函館は子育て支援が足りていないということではないと思う。

(田村委員)

今の齋藤委員の意見に少し重複するが、やはり企業誘致という部分については大企業が少ないというところもあると思う。私も函館に住んで1年ぐらしか経っていないが、人口規模に比して、大規模な商業施設などがすこし少ないと感じるところもあるので、子育て世代などには物足りなさがあるのではないかと感じている。函館市単独ではなかなか取り組みにくい部分があると思うが、近隣の市町村とも協力して、そういったものについて検討をしていただきたい。

(相庭委員)

私は20歳になる息子が1人いるが、学生であり、これから結婚や、就職などと色々と考えなくてはいけなく、人生の岐路に立っている。私はその親であるが、本当に悩みが尽きない。私が子育てしていた時、子どもが小さかった時のことを考えても、あまり情報がなく、今で言うワンオペのような形で子育てをしていた。私の夫はすごく仕事の忙しい人であったので、私は1人でずっと家において、小さい子のお世話をしていた。まだ保育園や幼稚園、託児所などに行けるような年齢でもなく、核家族化している最中であったので、おじいちゃんやおばあちゃんは周りにいなく、助けを求める人も特にいなかった。友達がいなかったわけではないが、同じ世代の子どもがいるというママの知り合いがいなかったので、確かに孤立を感じていた。私はNCVで働いているなかで、色々なところへ取材をする機会があるが、子育てサポートでもこういったプログラムがあるんだとか、ママたちにもっと教えてあげなくてはいけないということを取材活動を通じて感じた。当時は子育てしながらNCVで取材をしていたので、サービスを利用しているママやパパの話聞き、情報を発信していくことは、すごく大切なことであると実感した。

今ちょうど私の息子が給料も高いところで就職したいということで、家族会議をしているが、なかなか函館で働くとなると難しく、ここがいいと思っても、例えば休日が少ないであるとか、お給料は高いけれど休日が少ないであるとか、残業が多いであるとか、給料は安いけれど休みがたくさんあるなど、ちょうど良いと感じる企業が見つけれないというのが彼の中の現状である。私はたまたま自分の好きな仕事をしていて満足しているが、今の子どもたちが函館にある企業に満足してもらえるのかというのは、日々考えているところである。我が家の中の課題ではあるが、社会経験もまだ少なく、これからいろんなところを見て成長してもらえたらなと思っており、息子の友達との交流もあるので、子どもたちの話を聞きながら、何ができるのか、私の仕事で役立つことがもし何かあればということで、色々相談に乗るなどして、アドバイスをしていきたい。

(長谷川委員)

アンケートが非常に参考になる。現在の函館の状況を映し出しているのではないかと感じた。

先ほど齋藤委員からもお話があったが、やはり安定した雇用や所得というのが最大の課題であると思う。議事1の人口の推移や、現状の中でも出ているが、やはり団塊ジュニアの方々の時は本当に雇用がなく、そして非正規雇用がどんどん増えた時代であった。今の子育ての話などもあるが、まず、子育てする前に結婚しなければいけない。その結婚自体が、アンケートの中でも家族を養えるかどうかというような回答もあったと思うが、まずは安定した雇用と一定の所得がなければ結婚に踏み出してもいけないであろうし、その後に、子どもを2人、3人欲しいと思っても、1人しか持てないというようなことになっていると思う。それをどう函館の中に安定した雇用と、今現実には若い方でも非正規で働いている方が多くいるが、そういった方をどう正規雇用につなげていくのかということが1つの鍵になるのではないのかと思う。

あとは、大企業が少ないので、学校を卒業した方々に地元で働いてもらえるような、そんな魅力ある企業をどう誘致できるのかというようなことも大きな課題であると思う。

子育てに対しては、先ほど奥平委員長の話にもあったが、北斗市では早くから高校生までの医療費の無償化を行っており、函館市は行っていないので、子育てをするのであれば北斗市にいた方が良いという方々も多くいたと思う。今、同じような形で函館市でも実現できるようになったので、その辺の様々な子育てのことについては、しっかり市民の皆さんに分かりやすく周知していただきたい。

(奥平委員長)

将来の結婚についてどう考えているか高校生、大学生に聞いているアンケート項目があり、行政が結婚を支援するために取り組むべきことの回答を見ると、安定した雇用の確保と結婚に係る経済的支援と非常に現実的な回答となっており、これはどこかで反映しなくてはいけないのだろうと感じた。やはり函館市に残るかどうかという話になるが、この高校生、大学生が残らないという事態が1番の問題であり、先ほど人口ビジョンのところでも、とても窪んだ年齢別の転出入のグラフがあったが、ここのグラフが1番端的に問題を表している。若者が大量に出ていっているのを、はっきりグラフが示している。若者はいませんということを、高らかに宣言してるグラフであると思う。この状態をどうするのかということが問われていないような気がしており、どう問うのかということは大事であると思う。ちょうどこのアンケートが、この窪んだところの人たちに対するアンケートということになる。窪んだところの年代の人が函館市に残っていないということが、このグラフから見えてくる。その点をどのように捉え、どのような対策をしていくのかということを考える必要もある。

幸福度調査の項目で、64ページの4—⑦に初等・中等教育と書いている。初等・中等教育については問うているが、高等教育については問うておらず、設問項目の中にない。後期中等教育の中に大学は入るが、だからと言って、大学について問わなくてよいのかという部分は感じたところである。その部分で言うと、例えば大

学，よく企業誘致という話をするが，大学誘致という話も当然出てきてもおかしくないのではないか。一時話題になった，看護系の大学など，色々あったかと思うが，やはり子どもたちのニーズにどう応えていくのかという部分をしっかり考えていく必要がある。子どもたちがどんどん函館からいなくなってしまうということは，ミスマッチが問題であるというところは分析結果からも見えてくるところである。この部分について皆様の考えを伺いたい。

(岡崎副委員長)

看護系の大学については，検討中だと思う。市内に4校の専門学校があるが，医療の質というのはどんどん高くなっており，医師の働き方改革もあり，看護師など医師以外の方々の対応が求められている。そういう意味では，それに合わせた形での，4年制大学のニーズがあり，必要性はあると思う。

それから，例えば保健師になりたいと思った時に，今はかろうじて教育大学で取得できるのだろうが，やはり外に出なくてはならないとなってしまうと，地域での専門職が減少してしまう懸念がある。4年制ということの意味は非常にあるのかと思う。それから，私が関係しているところというと，保育学科や，短大だが，そこでも学生数の減少というのは避けては通れない問題になってきている。そこでも人材を育成し，このまちで保育士や幼稚園教諭，あるいは栄養士になって，底力を発揮してもらおうという人材の養成校がなくなってしまった場合に，どのように対応していけるのかという懸念はある。その学校自体の経営ということも問題点ではあるが，人材の養成ができないことによる地域の還元力というものが減ってしまうということを，真剣に考えていかなくてはならないと思う。

(長谷川委員)

これから生産年齢人口や，年少人口が大幅にどんどん下がっていく中で，大学に限らず，高校や小中学校も含め，本当に維持していくことができるのかということも考えた。今，小中学校の教員も確保がなかなか難しく，70歳を超えても教鞭を執っている方もいるなど，今，色々な議論がされている。子どもも少なくなり，働く方も少なくなった時，色々な産業の中でどのように集約をしていくのかということを考えなくてはならない時代になってくると思う。それに合わせ，大学もどのようなやり方があるのか，今，答えは持ち合わせていないが，そういったこととセットで考えていかなくてはいけないのではないかと考えている。

人口ビジョンの低位推計でいけば，13万7千人いる働いてる方が2070年には3万人しかいなくなった時に，どこを1番重点的にやっていくのかということも含めて，本当に悩ましいなと思う。

(相庭委員)

小中学校や高校生もそうだが，郷土愛の授業というのを函館では行っているのかなと思う。私の現在の職場では，色々な地方から集まったスタッフが多く，函館の人は，あまり函館のいいところを自慢しないと言われたことがある。夜景はあり，最近はあまり獲れないがいかも美味しい。確かにあまり函館の自慢みたいなことを地元の人にはしていないのではないかと思う。自分に置き換えてみても，そうだった

かもしれないと思う。もしかすると、学校の中で先生たちが、余談で函館のいいところアピールのようなことを話し、子どもたちに先入観を植え付けるようなことがあると、高校生、大学生になった時に地元のために何ができるだろうというのを子どもたち自身が考えるのではないか。今は SNS の時代で、子どもたちは発信力もあるので、高校生や大学生が函館のまち自慢のような、私たちはこのまちを良くしていきたいであるとか、住み続けたいであるとか、都会に出ても地元のふるさとのために何かしたいと思っているということの情報発信があれば、全世界の他の若者が見た時に、北海道の函館市という良いところがあるというように注目が集まり、定住してみたいというところにつながっていくのではないかと思う。

今の子育て世代の支援の充実ももちろん大事で、お年寄りの方もたくさんいるので、高齢者のことも考えなくてはならないが、もっと小さい子を函館の自慢をしてくれるような人材に育てていくということも、ものすごく大事だと思う。

高校生や大学生は TikTok とかインスタを使って、自分たちの情報発信をするのがすごく好きで、日常的にそういったものを使って交流をするが、そこで地元の自慢をする子どもたちはあまり見たことがないので、もし、そういうことを発信するような子どもたちが増えると、大学などの生徒の誘致などにもつながっていくかもしれないし、スポーツ推薦などで、全道各地から優秀な選手を集める学校などもあるが、そういう形で、観光とか、良い若者たちがたくさんいるまちなんだということが広まれば、どんどん若い人たちの人口も増えるのではないかという淡い期待を抱いている。

(田村委員)

今の議題の趣旨は、20 歳から 24 歳の間に大幅に若い人がいなくなっているところだと思う。大学を選ぶ際に考えるのは、その大学で何を学ぶのか、自分の学力に合っているのか、自宅から通える範囲になるのかなど、そういった観点から選ぶと思う。函館に大学の選択肢が少ないのかどうなのかという、なんとも言えない部分はあるが、他の地域の大学で言うと、帯広市や小樽市や北見市では連携し、各大学で学びたい授業を受けることができるような取組を行っているので、函館市としてそのような取組ができれば、選択肢も増えるのではないかと思う。

(齋藤委員)

今大学の話が出たので、そこに特化してお話したい。

人口がこれだけ減ることが明らかになっている中で、新たな大学を作るというのは非常にハードルが高く、むしろ、これから国立大学の統廃合が進み、その中で、おそらく北海道教育大学の分校が 1 番危ないだろうと思う。逆にどのように維持していくか。例えば岩見沢分校はスポーツに力を入れている。先ほど岡崎副委員長が話された、福祉などのそういう分野に特化した形で、この函館分校を変えていくなど、なんとか残す努力をしていかなければならないと思う。特に国立レベルでは増えることは、まずあり得ないと思わなくてはならない。

また、今、私は会社経営をしており、人手が足りなくなることは目に見えている中で考えているのは、人手を維持するというよりも、機械化を進め、今まで人に頼っていた部分を、自動チェックイン機などを使って自動化できるようにすることであ

る。また、他のところと協力して、必ずしも対面でなくて、リモートでもできるという環境にしている。そちらの方に力を入れ、人口減少を前提とした対策を今、進めているところである。人が減るのは間違いなく、これは函館に限ったことではない。そういうところを考えていかななくてはならないと思う。

(奥平委員長)

教育大は教職大学院が衣替えをし、修士課程まではあったが、今度、博士課程を設置することになった。これは連合大学院として、北海道、大阪、福岡の教育大3校で共同して連合大学院を設置することで、もうスタートしているところでもある。そのような状況だが、大学を取り巻く環境は非常に厳しくなっていてきており、あぐらをかいていても、学生は来てくれないということで、私も出前授業で年に5回ほどは色々なところへ出かけている。そのような努力もしているが、焼け石に水という感じがする。やはり市の方でも、計画というか、目標を持って動いていただきたい。例えば、旭川は旭川大学を市立に切り替えた経緯がある。元々は私大だったのが公立大学へ変わるというところもある。そのようなことを考えると、色々やり方はあると思う。そのようなことも、もしかすると今後必要になってくるのではないかと考えている。ちなみに未来大学は周辺2市1町の出資による公立大学であり、市立大学ではないというところを申し添えておく。

その他皆様から質問・意見はないか。それでは、議事(2)令和6年度地方創生に関するアンケート調査、地域幸福度(Well-Being)指標に関するアンケート調査結果報告書については、終了したい。

それでは、議事(3)第3期活性化総合戦略(骨子案)に入る。資料について事務局から説明をお願いします。

(事務局 木谷課長)

【資料3】に基づき説明

あらかじめ、本日欠席している委員から、事前にいただいたご意見を紹介したい。

中野委員からは、基本目標4について、若い方が函館市に愛着を持ち、1度市外へ出ていったとしても、また戻ってきたいと思えるような、郷土愛を育む取組という観点から、歴史や文化の伝承という内容の追加についてご意見をいただいた。

また、北見委員からは、結婚していない理由に男女間でギャップがあることについて、都市部と比較した場合の傾向と比較できれば良いのではないかというご意見や、今後、人口減少の抑制のためにどのような施策を行うべきかという視点で考えた際には、アンケートなどの結果からも雇用などに関する施策の方がより重視されるのではないかというご意見をいただいた。

(奥平委員長)

ただ今説明のあった資料3について、質問や意見はあるか。

私からは、基本目標の2つに「かなう」が出てくることに違和感がある。基本目標の1と3にあるが、表現が軽く感じるのではないか。

(事務局 木谷課長)

「かなう」の表現について、資料3の1ページに、下段の参考としてデジタル田園都市国家構想総合戦略の全体像ということで記載している。その中の、緑色の部分に地方の社会課題解決というところで、結婚・出産・子育ての希望をかなえるという記載がある。我々も国の基本戦略を踏まえて作成をしているので、特段、「かなう」という表現については違和感がないと捉えている。

(奥平委員長)

基本目標の3にもある。

(事務局 木谷課長)

この「かなう」という表現自体は、どこに使用するかという議論はあるが、特段、目標にそぐわないとは考えていない。

(奥平委員長)

委員の皆様からご意見はあるか。

(岡崎副委員長)

基本目標のところでは、「かなう」という表現が、意味的には間違っているわけではない。ただ、奥平委員長の意見にもあるように、短い文章の中で、2か所同じような言葉が使われているということなので、言葉について精密に練っていただきたいという気持ちもある。また、基本目標の2には魅力ある雇用環境の創出とあり、基本目標の4には魅力あるまちをめざすとある。こちらも、魅力という言葉が2か所使われている。魅力というのは非常に大事なことだとは思いますが、印象としては、この短い文章中で、何か別の言葉に変えながら、そこにふさわしい言葉を抽出することはできないものなのかと思う。

(奥平委員長)

他に何かあるか。そのままだでも特段問題はないが、少し違和感を覚えたところがあるので、次回までに検討いただきたい。

いっそのこと、基本目標1は必ずかなえるというような表現でもよいと思う。結婚、出産の希望が必ずかなう、未来にひらくひとが育つまちをめざすというように、強く言った方がよい気もする。「かなう」の使い方でも変わらぬと思うので、ご検討いただきたい。

私からもう1点意見を述べたい。2ページの3のところには本戦略におけるデジタル活用の考え方について記載があるが、いまひとつデジタル活用の方向性が見えない。どこかにデジタルについて記載があるか。具体的に何をデジタルで活用していく、どのような形でデジタルがSDGsに繋がるのかという部分が見えない。

(齋藤委員)

たしかに1つも具体的には記載されていない。

(奥平委員長)

デジタルと書いてるのは言葉だけで、中身がないように見える。事務局に伺いたい。

(事務局 木谷課長)

デジタル活用については、各施策をこれから進めていく上での手段である。目的ではなくて手段というところで、デジタルのビジョンの中でも、これからいろんな分野にわたってのデジタルの活用を謳っている。柱を縦とすると、そこを横串で通すようなことが、デジタル活用というように考えている。ただ、表現の仕方や考え方については、今後素案を策定していくにあたり検討していきたい。

(奥平委員長)

例えば、今、企画部交通政策課で実証実験をやっている MaaS の新しい取組などが、まさにデジタルなのではないか。そういったところも取り込んでいく必要があると思う。これについて、全く記載がないので、それを記載することにより、総合戦略の5年間で達成されていくのではないかなと思うが、事務局に伺いたい。

(事務局 阿部部長)

担当課長から説明をしたとおりであるが、デジタルのビジョンは別に策定しており、その中で、デジタルの力で便利で快適な住みやすいまちを目指しているところである。おそらく、デジタルの活用が見えないという部分に関して言うと、例えば7ページ以降の部分で施策項目の欄があるが、基本目標にぶら下がるような形で、色々な取組が、今後具体的に記載されていく部分になる。そういう意味では、先ほど担当課長が説明した通り、縦軸、横軸のような形で、具体の施策の中でエッセンスを踏まえながら、展開をしていくというようなことになると考えている。

(奥平委員長)

他に意見、質問等あるか。

(齋藤委員)

事前に説明を受け、骨子案の内容については、前回の会議で挙げた意見を取り入れていただき、申し上げることはないが、ここから先、具体的な施策のところ、色々意見が出ると思う。1つだけ意見を言うと、企業誘致というのは、ずっと言われているが、いくつか企業が来たところで、人口は劇的に増加しないだろうと考えている。もうひとつ、産業誘致まで踏み込んでいただきたい。決して半導体とは言わないが、人口が増えそうなのは千歳市と北広島市というようなところで、そこまでしないと一地方で大きく人口動態が変わることもないと思う。可能性はどうかとして、そこまで踏み込んでいただきたい。

(奥平委員長)

他に意見、質問等あるか。

素案の状態になった時には、資料3の7ページ、8ページの部分がさらに詳しい

内容になるのか。

(事務局 木谷課長)

お見込みのとおりである。

(奥平委員長)

他に意見、質問等あるか。以上で本日の議事についての質疑は終了したい。

…………… **3 そ の 他** ……………

(奥平委員長)

本日の議題は以上であるが、皆様から質問・意見はないか。

(事務局 木谷課長)

会議の議事録について、とりまとめ次第、委員に確認のうえ公表予定である。

…………… **4 閉 会** ……………

(奥平委員長)

これをもって、令和6年度第3回函館市まち・ひと・しごと創生推進会議を終了する。円滑な議事進行へのご協力に感謝する。

以上